

甚吾平・古川与十・角野純三郎・三宅大蔵

○日田 広瀬淡窓・牧逸作・武谷祐之・麻生伊織

〔参考文献〕『豊浦町史』、『豊北町史』、『長門市史』、『萩市史』、『広瀬旭荘全集』、『淡窓全集』ほか

(早稲田大学大学院教育学研究科)

『回生録』の研究(1)

1) 昼田源四郎、末田 尚

はじめに

『回生録』は、広島県山県郡大朝村(現大朝町)で周辺村人たちの診療に従事した漢方医家三代にわたる診療録である。(この概要については、すでに末田が第八九回日本医史学会総会で発表した)。本研究では、初代・進藤周岱による文化十二年(一八一五)から文政二年まで五年間の診療録をおもな史料としてもちいる。

『回生録』は文字どおり江戸時代庶民のカルテであり、それ自体も貴重な史料だが、診療録と平行して医師の日記がつづられ保存されているため、いっそう史料的价值が高いものとなっている。『回生録』をおもなテキストとし、日記を補完的に読み解くことで、江戸時代の庶民の病気の

有り様や、その治療にたずさわった在村医家の診療活動の
実際を説明するのが本研究の目的である。

一 患者数、診療圏、使用薬方

年間に記載された患者件数は平均五一四件、重複を除いた年間患者実人数は平均三八〇人ほどである。一件あたりの処方回数是最小一、最大二四で、平均五・六回である。多くの事例で、処方日は日ごとに、ときには一日の内で、（おそらくは証の変化に応じて）次つぎと変方されており、こまめに患者を診ていたことがうかがえる。

処方されている薬剤は三百種ちかくに及び、さらに加減方がなされている。一例を挙げてみよう。

一、大門内利兵衛 頭痛悪寒咳嗽心下痞食不進。四月六日十弓蘓加杏二、同七日不換金加葛杏二、同日積柴胡加兵二、同八日大柴加奚兵二、同夜七清加兵二、同九日又加杏二、同十日四、同十一日行香蘓加兵三、同十二日癸陳加枳橘三、……同十五日分心氣加莎枳兵三、同十六日三消去大三、……同廿六日胃苓二

使われている薬方の一覧をスライドで示す。各薬方の出

典を調査中だが、わからないものも多いので、ご教示をお願いしたい。

往診が診療の中心的な形態だったようだ。泊まりがけの往診も多い。現大朝町内の患者が約七五%でもっとも多く、約十二キロ離れた旧市木村の患者が約十二%とこれに次ぐ。患者のおよそ九五%は医師の居住地から十五キロ圏内の村むらの住民である。医師の一日の足跡を追ったものをスライドで示す。

二 疾病分類

簡単な症状記載をおもな手がかりとし、使用薬方を参考にしながら、文化十二年の全事例を第九回国際疾病分類にもとづいて分類してみた。分類の手がかりとした症状記載を例示すると、以下のようなものである。

感染症及び寄生虫症「痘瘡 悪寒、頭痛、嘔吐」「淋」「揚梅瘡」など／神経系及び感覚系の疾患「中気、左半身不仁」「眼疾」など／呼吸器系の疾患「感冒」「流行風」など／消化器系の疾患「腹中満悶、或時吐苦水」「下痢、腹痛」など。症状記載が乏しく、分類困難なものは診断名不明確

な状態に分類した。

その結果、消化器系の疾患二五・二%、呼吸器系の疾患二四・〇%、症状、徴候及び診断名不明確の状態十三・一%、感染症及び寄生虫症十二・六%、神経系及び感覚器の疾患六・一%の順に分類できた。これは昭和二十四年（一九四九）の厚生省統計の罹病率の順位、すなわち呼吸器系の疾患二二%、消化器系の疾患二一%、症状老衰及び診断名不適當の状態十四%、伝染病及び寄生虫病十一%、神経系及び感覚系の疾患十%と、ほぼ一致している。

詳細な検討はまだ出来ていないが、注意をひく点として以下のようなものがある。

①痘瘡とその後遺症の事例が文化十二年だけで二三件（五・四%）もある。末田によれば、山県郡内に種痘が伝わるのは少し時代のさがった嘉永年間であり、それまではこの地域でも、痘瘡が猖獗をきわめていたことがうかがえる。②妊娠・産褥の合併症が十七例（四・〇%）とかなりの数がある。これはおそらくは、当時の母体の保健状態のわるさを物語るものであろう。③慢性疾患の取り扱い件数は少なく、急性疾患の診療が中心であった。

1) (針生ヶ丘病院)
2) (広島県山県郡医師会史編纂委員会)